

## 『松蔭日記』とその読者

Gaye Rowley

ここ数年、私は正親町町子（二六七九～一七二四）の『松蔭日記』（一七二二年頃成立）の英訳作成に専念してきた。言うまでもないが、宮川葉子氏の『柳沢家の古典学（上）——「松蔭日記」（新典社、二〇〇七年）の町子自筆本による新しい翻刻が、私の翻訳を可能にした。通釈や数千に及ぶ細かい注釈付きの宮川氏の労作は、「柳沢家の古典学」はもちろん、いくつもの今まであまり知られていない世界に焦点を当て、目に見えるようにした。徳川五代將軍綱吉（一六四六～一七〇九、在位一六八〇～一七〇九）の側近である柳沢吉保（一六五八～一七一四）の私生活、裕福な武家とそうではない公家の微妙なやりとり、何人もの公家出身女性の人生、そして平安時代文学の近世における受容、など、宮川氏の『松蔭日記』は読者に多くを語っている。

『松蔭日記』に惹かれた理由はやはり『源氏物語』の流れをくむからである。『源氏物語』は女性によって書かれたが、平安時代より現代まで、写本を校合（複数の写本を見比べて訂正）したり、注釈書を作成したりして物語を

後世に伝えたのは男性の公家、歌人、近世に入ってから国学者で、彼らが賞賛されることが普通である。しかし一方で、女房として働いていた女性も貴重な役割を果たしていたことは忘れてはならない。<sup>①</sup>近衛家に生まれた花屋玉栄（一五二六～一六〇二頃）は、男性による細かすぎる注釈書を批判し、女性のための『源氏物語』の注釈書『花屋抄』（一五九四年完成）と『玉栄集』（一六〇二年完成）を書いた。また、中院仲子（一五九一頃～一六七二）という後陽成天皇（一五七一～一六一七、在位一五八六～一六一一）の権典侍は猪熊事件に巻き込まれた後、『源氏物語』関係の歌集などを流罪先に持つて行った。<sup>②</sup>

『松蔭日記』の著者である正親町町子も玉栄や仲子と同じく、過去の『源氏物語』の女性読者の一人である。柳沢吉保の側室として町子は一六九三年から二十年以上、吉保が亡くなる一七一四年まで仕え、その間四男の安通（後経隆と改名、一六九四～一七二五）そして五男の時睦（二六九六～一七五〇）を生み育て、主人吉保の伝記とでもいべき『松蔭日記』を書いた。その著述過程で『源氏物語』が『松蔭日記』の重要なモデルとなったことは周知のとおりである。『松蔭日記』と『源氏物語』の深い関係については先行研究も多いので、本論では触れない。<sup>③</sup>

### 『松蔭日記』

『松蔭日記』という題名は、奈良県北部の大和郡山市・柳沢文庫に現存する町子自筆草稿本による。宮川氏が指摘されるように、清書本の表題は「松家気」で、草稿本は「松かけの日記」である。<sup>④</sup>が、『松蔭日記』は日記ではない。状況の描写、叙述は年代順に整理されているものの、作者の日々の出来事の記録ではない。『松蔭日記』は、『源氏物語』や『栄花物語』のように、女性の語り手によって語られる一つの物語、という形をとっている。語り手はどこにでもいる、何でも見る、聞く、察する、王朝物語の女房のように、最初から最後まで読者に語り続ける。そ

うして書かれた物語はどうなっているかという点、見事な即時性、直接性、読者が語り手によってその場に連れて行ってもらったり、主人公の柳沢吉保あるいは語り手の頭の中まで見せてもらったりするかのようである。例を二つ見よう。<sup>(5)</sup>

巻第二「たびころも」で、綱吉が初めて吉保邸に御成になる元禄四年（二六九一）三月二十二日の準備や当日の様子が詳細に描写される。綱吉が自ら能を舞う場面である。

よき程に、物の音につれて静かに出させ給ふ御ありさま、あなめでたと見えたり。（略）はじめには難波、橋弁慶などいふ。羽衣、是界、乱などいと面白う、物の音もうち合ひ（略）みな人思ひ消ちたり。家人などもとりぐに奏し聞こえき。見奉る人々は、一殿、内隙なく立ち込みて、心の限り目もあやに詠入て、限りなく驚くばかり面白き時とは、思ほえず「や、」と誉め囃し奉りなどして、いと賑はしく花やかなる御遊なりかし。（宮川『松陰日記』158―159頁）

語り手は「あなめでたと見えたり」とか「見奉る人々は……思ほえず「や、」と誉め囃し奉りなどして」と言う表現を選び、綱吉が自ら能を舞うその場にいたかのような雰囲気を作成する。

ここで「作者町子」ではなく、あえて「語り手」という言葉を使うのは、「語り手」は「作者町子」が作った登場人物だからである。実在人物の徳川綱吉や柳沢吉保も登場人物であるが、彼らは『松陰日記』の外にも存在し、他の歴史資料や文章でも行動が確認できる。言うまでもないことだが、この「語り手」は『松陰日記』の外には、存在しない登場人物なのである。<sup>(6)</sup>

では二つ目の例を見てみよう。巻第八「法のともし火」で、東叡山寛永寺に根本中堂が建立される様子が詳細に描写される。元禄十一年（一六九八）九月三日には中堂供養が行われる。

庭上を見れば、回廊の前懸けて、例の兵具しつ、ことごとくしき弓矢なにやと才めきたる様にてあり。こればかりも世の常の事とは見えずかし。（宮川『松陰日記』325頁）

さて雅楽寮の官人、氣勢装ほしうつくろひて、左右に分かれて舞人を誘ひつ、南門の傍らより入。蝶、鳥、菩薩の舞人、目慣れぬ様に飾り立て、いと面白き物の音吹たて、うち合せて参る程、そゞろ寒きまで面白う、浮き世の事とは見えず麗しういみじ。（宮川『松陰日記』328―329頁）

綱吉が能を舞う場面と同じく、語り手は「庭上を見れば」、「世の常の事とは見えずかし」、そして「そゞろ寒きまで面白う」などの表現を用いて、その場にいたかのように、出来事を述べる。

ここで見てきた二つの例は『松陰日記』の物語的性格をよく伝えている。それはフィクションだから、というのではない。綱吉が元禄四年三月二十二日に初めて吉保邸に御成になったことは、他の史料からもわかるように、歴史的事実である。が、『松陰日記』の作者町子は、当日は吉保邸にいなかった。綱吉のこの最初の御成は、町子が吉保の側室になる前の出来事である。同じように、元禄十一年九月三日に、寛永寺の中堂供養が行われたのも歴史的事実である。が、『松陰日記』の作者町子は、当日もちろんその場にいなかった。そもそも、幕府の公の儀式に女性が参列しないのは普通のことであるから。

物語作者は、自分が経験していない出来事を語るのが仕事で、どれほどリアルに、説得力があるように読者に語り得るかが、腕の見せどころと言えよう。『松蔭日記』の最初の三卷ないし四卷では、町子が吉保の側室になる前の出来事が語られている。例えば、徳川幕府の設立、柳沢家の由来、吉保の嫡男吉里の誕生、吉保の父安忠の死、柳沢家の菩提寺になった正覚山月桂寺の整備、などの出来事である。が、このことは町子が吉保の側室になった後も同じである——『松蔭日記』をとおして、町子自身がまったく経験していないことも、確実に経験したと思われることも、語り手によってとでもリアルに語られている。

町子が経験していない出来事を、歴史的事実に沿って正確に語り手に語らせたのは何を参考にしたのだろうか。周知のように、参考にしたのは柳沢家の公的記録『楽只堂年録』である。元禄十五年（一七〇二）四月六日、江戸神田橋にあった柳沢家は火災により、すべての記録類を消失した。吉保はお抱えの学者、荻生惣右衛門（後の徂徠、一六六六—一七二八）に命じて各所に残る記録類を収集し、同年十二月までに復元させた。その記述は、吉保の先祖より始まり、宝永六年（一七〇九）六月十八日、嫡男吉里に家督を譲り、妻・側室たちを連れて自ら六義園に隠退するまで、詳細に記している。

もちろん、町子が『楽只堂年録』を参考にしたのは何も私の指摘ではない。宮川氏は『松蔭日記』の注釈で史実との対比を細かく述べられている。『楽只堂年録』を多く引用され、興味深い。比較してみると、『楽只堂年録』の記述は『松蔭日記』の記述より遙かに詳細であることが一目瞭然である。例えば人々が交わした贈答品、あるいは綱吉や公弁法親王の御成の際に飾った調度品、あるいは何かの祝いに人々が詠んだ歌など、『楽只堂年録』では徹底的に記されている。『松蔭日記』では、語り手が「省筆」という技法を非常にうまく使用し、『楽只堂年録』では延々と続く、列挙されている品々や歌を省く。例を二つ見てみよう。

卷第七「春の池」では、綱吉の母、桂昌院が吉保邸に御成になり、語り手はこう書く。

奉り物、御引出物、またいとさまざまにてありけれど、何とかや、さやうの折おりの事、必ずしも書き立ん事かは。」(宮川『松陰日記』288頁。『楽只堂年録』元禄十年(一六九七)九月十二日の条を参照。)

卷十四「玉かしは」では、吉保が元禄十五年(一七〇二)八月十五夜に開いた歌会の様子が語られる。その際に詠まれたたくさんの歌を語り手は「水に依りて月明らかなり」という題の三首しか載せない。それは「君」、つまり吉保が詠んだ一首、「正親町前大納言公通卿」、つまり町子の父親が寄せた一首、そして「太郎君の母君」、つまり吉保側室の飯塚染子(一六六七～一七〇五)が詠んだ一首である。残りの歌は「さてその日の歌うたども多くありけれど、珍めづしげなきは載のせず」と省略する(宮川『松陰日記』532-533頁)。それに対して『楽只堂年録』元禄十五年(一七〇二)八月十五日の条では、いくつもの題に寄せた二十八首もの歌が収録されている。

以上のように、作者町子は『楽只堂年録』の記録を参考にしながら、語り手をもって「省筆」という技法を適切に利用して大幅に短縮し、歴史的事実を、物語という形の作品に変貌させるのである。物語の「省筆」という技法に関しても先行研究が多く、興味深い問題だが、枚数に限りがあるため本論ではこれ以上ふみこんで言及9しない。

『松陰日記』では『楽只堂年録』に記録されない出来事も記される。特に町子と吉保の親密な関係が示唆される箇所は一切『楽只堂年録』に記されない。短い例を一つだけご紹介しよう。卷十九「ゆかりのはな」では、吉保と語り手の和歌の贈答がある。

此頃御前近き藤の花房のいと長きに付けて給はせたり。

咲く藤のゆかりとならばかけて見よ花の萎ひの長き契りを

いでさし過ぎたれど、

藤波にかけても嬉し言の葉の花のゆかりの深き契りは

などまめやかに聞こえつ。(宮川『松陰日記』691頁)

この贈答が本当にあつたかどうか、『楽只堂年録』など、他の史料では照らし合わせることができない。読者として語り手を信じたい、実際に吉保と町子自身の間にもこのような贈答歌が度々あつた、と思いたいところだが、実際はわからない。

以上の例などに鑑みて、『松陰日記』は事実に基づいた物語だけではないと考えられる。綱吉の賢明、吉保のつとめぶりなどは、大いに語られるが、吉保と語り手の贈答歌のように、町子自身の経験と思われる出来事も語られる。『松陰日記』は歴史書でもあり、伝記でもあり、一種の回顧録でもある。

ここで「語り手」ではなく、突然「町子自身」という言葉を使用するようになったのは、『松陰日記』について話したり書いたりするうちに、物語文学の研究が度々依拠してきた「語り手」という概念の有益性にはやはり限界がある、と時々感じるためである。『松陰日記』の語り手でさえ、その不都合に気づく場面もある。特に、語り手は、町子の生まれ育った家族や子供、あるいは自身が実際に経験したと思われることについて言及するとき、「語り手」と「作者」のギャップは消えがちである。例を一つ見てみよう。

巻第六「としのくれ」では、元禄九年(一六九六)六月十二日に町子の二人目の子供が生まれる。語り手は次の

ように述べる。

その月、五郎君生まれ給ふ。産屋のうち、何くれとめでたきさまなれど、よそ人のやうに何かは言ひたてもせんと思へば聞えにくくて。(宮川『松陰日記』267頁)

子供が生まれたといつもならめでたく言うが、今回は自分のことを語るので、中々、と語り手は難しがる。が次の文章で語り手は普段の落ち着きを取り戻す。

秋になりて御所の渡らせ給ふ折に、御対面給はり、有俊の御佩刀など給はらせ給う。何事も四郎君の折に交らずかしづかれ給。(宮川『松陰日記』267頁)

このような箇所を読んで、結局語り手というものは、独立した存在ではない、という結論に導かれるのではないだろうか。語り手が選ぶ言葉も、そもそも語り手の観察も、作者町子自身と同一のものとは言わないが、少なくとも作者町子から始まるのではないかと考えられる。

『松蔭日記』はどのような作品なのかについてはこのぐらいにし、以下本題の『松蔭日記』の読者について移りた



## 『松蔭日記』の読者

『松蔭日記』は何も柳沢家秘蔵の書物ではなかった。むしろ、流布するために作られたものと言えよう。なぜなら、そこには二つの理由がある。

一つ目は、もっぱら歴史的事実を語る『楽只堂年録』は、編集された当初からほぼ一六〇年もの間、明治三年（一八七〇）まで、柳沢家内部でしか閲覧できなかった史料だったようである。宮川氏が島田駒男氏の研究に基づいて次のように指摘されている。

九州秋月藩の故実学者坂田諸遠は、吉保の実像に迫ろうと弘化三年（一八四六）頃から、『楽只堂年録』の借覽を幾度も願ひ出た。しかし叶わず、明治三年（一八七〇）になりようやく縦覧がなつたという逸話が残る。<sup>10</sup>

坂田諸遠は、後に『楽只堂年録』など、柳沢家内部の史料を基に「甲斐少将吉保朝臣実記」という吉保の伝記を書くが、出版には至らず、いまだに写本のまま柳沢文庫と東京大学史料編纂所で眠っている。このように、明治三年までは『楽只堂年録』を柳沢家以外の人が参照できない状態で、その代わりに『松蔭日記』の方が広く流布されたらしいのである。国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」によると、現存する写本は四十本以上ある。<sup>12</sup>それらは、近世日本でも地理的にも広範に享受されたことがわかるもので、北は佐竹家家臣の江田助之進が文化十二年（一八一五）に写した写本で、後に秋田藩校の明徳館にあつた写本である。（現在は早稲田大学図書館の九曜文庫に含まれている）。<sup>13</sup>他は国学者の岸本由豆流（一七八九〜一八四六）<sup>14</sup>や、平田篤胤（一七七六〜一八四三）の弟子であつた中根雪江（一八〇七〜一八七七）も写本を持つていたようである。<sup>15</sup>

『松蔭日記』が初めて活字になったのは明治十八年（一八八五）で、近藤圭造（一八三二―一九〇一）が『存採叢書』という叢書に入れた。

『松蔭日記』が流布するために作られた、と思われるもう一つの理由は語り手の言葉にある。『松蔭日記』最後の巻「月花」では、語り手は次のように述べる。

千代も頼む松の木陰に書き集むる言の葉は、行く末遠く散り失せずして、我も人も仰ぎ伝へん程、いと頼もしう限りもあらかじかし。（宮川『松蔭日記』1064―1065頁）

宮川氏が説明されるように、ここの「松」は「松平」の意味で、柳沢家は綱吉から「松平」の姓を賜り、その「木陰」に与って生きるという意味であると考えられる。<sup>16</sup> 語り手は、『松蔭日記』に書いたことは、忘れることはできず、行く末遠く自身も他人も伝えていくのは頼もしい限りのことよ、と言う。

そして語り手が希望したとおり、実に様々な人が『松蔭日記』を読んでいたようである。いくつかの例を見てみよう。

まずは、柳沢家の人々に読まれたことがわかる。九州大学附属図書館に所蔵されている萩野文庫本が、町子が生んだ吉保四男の柳沢経隆の旧蔵本だったのでないかと思われるのは一つの例であるが、特に面白いのは、『松蔭日記』が柳沢家養女の寿量院土佐子（一六八二―一七五八）が書いた日記『石原記』（一七一七―一七一八年執筆）と『言の葉草』（一七三五―一七五三年執筆）に及ぼした影響である。言葉遣いと言い、和歌が散りばめられている文章と言い、土佐子を書いた物は『松蔭日記』によく似ている。柳沢家の子供達はみんな和歌を習い、土佐子も例外

ではない。町子ほど和歌・古典文学の典拠を日記の文章に溶かし込むことがなく、町子を書く和文ほど推敲されてはいないが、手本として、あるいは女性がこのようなものも書けるわ、というアイディアとして、土佐子の日記を讀むと舞台裏で『松蔭日記』が行き来していることを感じる。<sup>(18)</sup>

柳沢家の人々の他に、『松蔭日記』は和学者や儒者にも読まれたようである。前者の方は例えば京都の文人としてよく知られている伴蒿蹊である。蒿蹊は『近世畸人伝』という江戸時代の一芸に優れた文人や町民百人余りの伝記を書いたことでよく知られている。が、周知のように、蒿蹊の本領は和歌と和文研究で、『国文世々の跡』(一七七四年刊)という文章・文体についての歴史論と、『訳文童諭』(一七九四年刊)という文章作法論を著している。和文体の歴史に興味があった蒿蹊が、見事な擬古文でつづられている『松蔭日記』の写本を所蔵していたのも自然の成り行きであろう。<sup>(19)</sup> その写本に書き込んだり、寛政三年(一七九二)六月成立と思われる長文の奥書を加えたりしたのも、なるほどと理解できよう。私を知っている限りでは、蒿蹊の書いた奥書は公にはなっておらず、内容は「著者に対する些か皮相な罵倒をも含む」らしいことも興味深い。<sup>(20)</sup> 伴蒿蹊の書き入れのある写本は二〇〇四年に刊行された岩波文庫『松蔭日記』の底本となっている。<sup>(21)</sup>

『松蔭日記』は儒者にも読まれていた。広島藩浅野家に仕えた儒者の頼春水(一七四六―一八一六)はその一人であった。頼家のネットワークをずっと研究されておられる上智大学のベティーナ・グラムリツヒ・オカ氏のご教示を賜って知ったことだが、頼春水は、江戸から広島へ、妻の静に『松蔭日記』の写本を送り、その写しを作るようにと求めたらしい。<sup>(22)</sup> 静が書いた『梅颯日記』寛政五年(一七九三)一月十日に「晴、陰。加母來賀。松蔭日記、寫初」と『松蔭日記』の書き写し作業に入り、七日後の一月十七日に「陰。自大坂書狀至ル、當三日出。(略)松蔭日記、寫終」と早くも数巻を写し終えたようで、同年三月四日に「江戸・大坂書狀出す、江戸へ松蔭日記添ル」と江

戸にいる夫春水に送った。春水の方は、すぐに読んだわけではなさそうで、『春水日記』文化四年（一八〇七）七月二十九日条の「雨。松蔭日記卒業」によると読み終えたのは十四年後、退任・帰国した後のある雨の日であった。そしてまた『梅颯日記』文化九年（一八一二）三月十七日の条で「晴。進藤へ、寫物松蔭日記遣す」と記されているように、結局頼家の『松蔭日記』の写本は、春水・静の娘「十とお（一七八九〜一八二六）」が嫁いだ進藤家へと遣わすこととなったようである。

残念ながら、春水はなぜ『松蔭日記』を読みたがっていたのか、読み終えた印象はどうであったか、など、彼の『春水日記』に一言も書いてくれなかった。儒者である春水が女性による和文で書かれた書物へどのように興味を持ったのか説明しようとする、考えられるのは、吉保は自邸に二十人ほどの学者を召し抱え、その学者には荻生徂徠をはじめとする数人の儒者もいたことである。春水は、広島藩浅野家お抱えの儒者として、柳沢家の学者達の様子に興味があったと想像に難くない。春水は、その「抱え主」の吉保にも興味があったことであろう。周知のように、吉保は綱吉の側近ないし側用人として異例の出世を遂げたので、春水は、柳沢家がその家格以上に権力を振るえるプロセスについても、『松蔭日記』を読んでその背景を探ろうとしたのかも知れない。<sup>24</sup>

伴蒿蹊、頼春水の他に、著名人で『松蔭日記』を写したり所蔵したりしていた人に大田南畝（一七四九〜一八二二）があり、「大田覃ふか」として写した写本は静嘉堂文庫に入っている。

『松蔭日記』が流布した過程について、正直にいうと私の力不足で調べ切れていないところが多く、今後の若い研究者に譲りたいと思う。

日本語圏の読者はさておき、では英語圏の読者にとって『松蔭日記』はどのような意味をもつのだろうか。言うまでもないが、私は日本語の本文が読めない読者のために『松蔭日記』を訳してみたので、その訳について少々ご

説明したいと思う。

### 『松蔭日記』の英語圏読者

宮川・池田両氏の論文で指摘されているように、『徳川実紀』が『松蔭日記』を採録している記事は二十箇所以上<sup>25)</sup>。幕臣や大名家臣が『松蔭日記』の写本を作ったり作らせたりした事実も示すように、日本では『松蔭日記』はこれまで歴史的事実を正確に伝えているからという点で重視されてきた。

が、英語圏の読者にとって、綱吉や公弁法親王などの御成の正確な日付、お供をされた幕臣の名前や官職、人々が交わした贈答品の種類や量の多さ、そのいわば「元禄の消費文化物語」的な様子<sup>26)</sup>は、私の予想ではあるが、あまり興味がないと考えられる。少なくとも、歴史的事実を正確に伝える書物として、私は英訳を作ったわけではない。女性が書いた文学作品として、作者が作った語り手の声で、最初から最後までストーリーを見事に語り通したことの方に、英語圏の読者は感心するのではないだろうか。その声をできるだけ英語でも聞こえるようにと努めてきた。

英語圏の読者にとって、『松蔭日記』に惹かれるもう一つの理由は、この作品が『源氏物語』の流れをくむものだからである。『源氏物語』の知識がいかに日本女性に文芸的生産のための材料を与えたか、その一つの例として、そして町子の場合、側室としての物質的な裕福さを吉保が与えてくれたことを町子の『松蔭日記』は鮮やかに示すものである。というのは、語り手が『松蔭日記』を通して『源氏物語』、『伊勢物語』や『古今和歌集』に始まる勅撰和歌集、二十一代集の和歌を実にたくさん引用し・引用に用いている。日本古典文学だけではなく、紫式部が『源氏物語』で中国の古典についてほめかすように、『松蔭日記』の語り手もしばしば中国の古典を引用する。巻第一「むさし野」では、『中庸』と『韓非子』が引用され、巻第三十「月花」では最も多く、『列子』、『世説新語』巻二十

三の「剡溪訪戴」の話、「桃源郷」という詩、『老子』、『後漢書』など、町子の教養の深さがいやになるくらい読者にみせびらかされている。

『松蔭日記』を訳したのには、もう一つ理由がある。日本の近世文学を日本語が母語ではない学生に教えようとする場合、素晴らしい英訳集は数冊ある。最も有名なのは、コロンビア大学のハルオ・シラネ氏の編集による『*Early Modern Japanese Literature: An Anthology, 1600-1900*』とらう二〇〇二年に刊行された一〇〇〇ページに及ぶ大冊である<sup>(7)</sup>。がその一〇〇〇ページのうちに女性の語った作品はたった三ページで、『おあむ物語』の英訳である。二〇一三年に刊行されたスミエ・ジョーンズ氏の編集による『*An Edo Anthology: Literature From Japan's Mega-City, 1750-1850*』も同様である<sup>(8)</sup>。四百五十ページのうちに、たった十ページが、女性の手によって書かれた作品の英訳として載っている。それがベティーナ・グラムリツヒ・オカ氏による、只野真葛の『奥州話』（一八一八年成立）の部分訳である。他に、大田垣蓮月（一七九一〜一八七五）と野村望東尼（一八〇六〜一八六七）による四首の和歌の英訳もここに載っている。このように英語圏で読むことができる近世文学作品のアンソロジーにおいて、女性作家はなぜか不在である。

「姿の見えぬ近世女性」というのはすでに一九八〇年代から日本史の世界で問題視され、論じられてきた<sup>(9)</sup>。日本文学の世界でも、門玲子氏は、一九九八年に出版された画期的な著書『江戸女流文学の発見』の中で、戦後創造された江戸文学という分野における女性の不在を説明しようとする際に、雅・俗という原動力を考慮しなければならぬと論じている。女性は、戯作のような大衆的ジャンルを讀者として消費したが、書いたのはそれらと異なり、ほとんどが「優雅」なジャンルであった。つまり日記（井上通女をはじめ、たくさんある）、擬古物語（たとえば荒木田麗女）、漢詩（たとえば柳沢家に務めていた内田桃仙や、頼山陽と交流が深かった江間細香など）、和歌（たとえ

ば正親町子子の異母妹と思われる祇園梶子など）のジャンルであった。<sup>30</sup> 俳諧でさえも、芭蕉流の俳諧が雅に変化していった頃には女性の参加が顕著になった。門氏は、日本で戦後にまず価値を認められ、研究されるようになったのは、俗のジャンルであり、雅のジャンルではなかった。ゆえに、無視されたのは女性の文化生産だけでなく、雅の文芸生産全体だったと主張されている。<sup>31</sup>

江戸時代の文化領域における女性の参加については、未解明な点が沢山ある。しかし、このまま彼女たちの存在を無視し続けることは、その時代の文学を、現在の読者にも、また未来の読者にも誤って伝えることになるのではないかと以前から気になっていて、そのためもあって『松蔭日記』の英訳を試みた。女性が含まれた近世日本文学とはどのようなものだろうか。若い研究者の今後の研究成果に大いに期待をしている。

最後に、英語圏読者のために英訳を作成する過程で、『松蔭日記』の本文に何が見えてきたのかについて少し触れてみたい。

『松蔭日記』を通して、語り手は登場する幕臣の役職名を使用しない。「大名」、「老中」、「若年寄」などの役職名は一切出てこない。代わりに語り手は大名のことを「国の主」、老中を「執政五人」、そして若年寄を「執事四人」と言う。気がつけば、『松蔭日記』には「江戸」という地名が一度も使われることがなく、そこでの出来事は「東」に「起きたこととして描かれる。將軍綱吉は「公方」ではなく「御所」で、「御成になる」のではなく「おはします」あるいは「わたらせ給う」のである。「江戸城」や「お城」さえも出てくることなく、吉保の仕事柄の「登城」や「下城」も「参り給う」、「登り給う」あるいは「下りさせ給う」、「帰り給う」として表現される。これらの表現を英語にすると、どうしても主語や目的語がないと文章が成り立たないため、「went up」だけではだめ。「He went up to the Castle」とか「He returned home」のように訳さざるを得なかった。



しかし英訳特有の問題よりもっと大事なものは、語り手はなぜ「江戸」や「お城」、「將軍」や「公方」、幕府の役職名などをわざと避けるのだろうか、ということである。作者町子としてその選択は何を意味するのだろうか。

町子を選んだ言葉、語り手に語らせた見事な擬古文は、『源氏物語』のような宮廷文学の再現であり、作者として宮廷女房に完全に成り済ます方法として理解できよう。町子は実際十四歳か十五歳ころよりずっと武家社会の中に暮らしたが、やはり公家の女性としての特権意識が最後まで強かった。徳川幕府より宮廷の方は上、「東」に武家の側室になるために自分は下ったけれども、そこで私は、非の打ち所のない方、光源氏のような「我が御前」に巡り合い、お仕えをした、という解釈も可能なのではないだろうか。結局「我が御前」柳沢吉保の栄華を語る過程は、書き手町子にとって自分がおかれた境遇を振り返る、ときには言祝ぐように書き換える過程でもあったと考えられる。

#### (付記)

特別講演当日そして拙論をまとめるに際して、多くのご教示とご訂正を賜った。ここにお名前をすべて列記することはできないが、宮川葉子氏には三十余年も前からいろいろご助言、ご批評をいただいたことを深く感謝申し上げます。また私の拙い日本語を快く直してくれた幾浦裕之氏に感謝する。

#### 【注】

- (1) 女房の役割、意識、文化生産について、田淵句美子『女房文学史論——王朝から中世へ——』（岩波書店、二〇一九年）を参照。
- (2) 仲子は『源氏物語』の注釈書『岷江入楚』（一九九八年完成）をまとめた中院通勝（一五五六—一六一〇）の娘で、彼女の数奇な人生については、拙著 *An Imperial Concubine's Tale: Scandal, Shipwreck, and Salvation in Seventeenth-Century Japan* (New York: Columbia University Press, 2013) を参照されたい。
- (3) 宮川葉子「楽只堂と『源氏物語』——正親町町子と松蔭日記を中心に」、『源氏物語の探求』第十五輯（風間書房、一九九〇年）所収、宮川葉子『柳沢家の古典学（上）——「松蔭日記」』（新典社、二〇〇七年）、上野洋三（校注）『松蔭日記』（岩波文庫、二〇〇四年）497、510頁、や島内景二『柳沢



- 吉保と江戸の夢——元禄ルネッサンスの開幕』(笠間書院、二〇〇九年) 113～155頁を参照。
- (4) 宮川『柳沢家の古典学(上)——「松蔭日記」』115～119頁。
- (5) 宮川、前掲注の「凡例」19頁で説明されるように、「ひらがなが続き意味がとりにくい箇所には漢字を宛て、その場合、原本の仮名書きはルビとして残した」とされる。本論に載せた引用はすべて宮川氏の翻刻を忠実に再現するように努めた。
- (6) 極めて初歩的な分析をお詫ひ申し上げる。「語り」や「語り手」についての徹底した研究は陣野英則『源氏物語の話しと表現世界』(勉誠出版、二〇〇四年)を参照。
- (7) 『楽只堂年録』元禄四年三月二十二日条。『徳川実紀』元禄四年三月二十二日条。
- (8) 『楽只堂年録』元禄十一年九月三日条。『徳川実紀』元禄十一年九月三日条。
- (9) 上野洋三(校注)『松蔭日記』(岩波文庫、二〇〇四年)付「解説」によると『松蔭日記』中「省筆」は合計76例ある。省筆という叙述法については、田村隆『省筆論「書かず」と書くこと』(東京大学出版会、二〇一七年)が詳しい。
- (10) 宮川『柳沢家の古典学(上)——「松蔭日記」の「解説」』32頁、注(12)。
- (11) Rebekah Clements『Speaking in Tongues? Damyo, Zen Monks, and Spoken Chinese in Japan, 1661-1711』『*Journal of Asian Studies*』七十六卷三号(二〇一七年) 606-607頁。
- (12) 国文学研究資料館・日本古典籍総合目録データベース [http://dbrec.nijl.ac.jp/KITG\\_W\\_498691](http://dbrec.nijl.ac.jp/KITG_W_498691) を参照。
- (13) 早稲田大学図書館・古典籍総合データベース <https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?condn=%20松蔭日記%20&szlm=31> を参照。
- (14) 平成二十七年十一月、「江戸後期写・四冊」として『古典籍展覧大入札会目録』140番に収録(6頁、写真51頁)、現在の所蔵先は不明である。
- (15) 島内景二『柳沢吉保と江戸の夢』(笠間書院、二〇〇九年) 19頁は『松蔭日記』の存在によって、吉保と国学を結ぶかすかな地下水脈が見えてくる」と指摘。
- (16) 宮川『柳沢家の古典学(上)——「松蔭日記」』106頁、注(11)。
- (17) 九州大学附属図書館所蔵萩野文庫本は、上野洋三氏校注『松蔭日記』(岩波文庫、二〇〇四年)の対校本として使用され、上野氏「解説」51頁によると、全四冊の各冊に「越後黒川藩鳥羽氏家蔵」の黒印が捺され、黒川藩の最初の大名は正親町町子の上の息子柳沢経隆であるから「藩祖の母の手になる本書が、伝写保存されたかと想像する」。書中十箇所ほどにわたって、原著の原注と別に「私云」として簡単な語注も加えられているという。
- (18) 柴桂子『黒田土佐子著「石原記」「言の葉草」——大名夫人の日記——』(桂文庫、二〇〇八年)を参照。
- (19) 伴高蹊について、河野貴美子他編『日本「文」学史 第三冊「文」から「文学」へ——東アジアの文学を見直す』(勉誠出版、二〇一九年)所収の田中康二「和文の文章論と和文集」やレベッカ・クレメンツ「日本の近世化における言語発見と俗語訳」を参照。
- (20) 上野洋三(校注)『松蔭日記』(岩波文庫、二〇〇四年)の「解説」51頁。
- (21) 他人が作った写本に伴高蹊が書き込んだものなのか、それとも写本の書写も伴高蹊の手によるものなのか、上野氏の解説からは私は読み取れず、ご教示いただきたいところである。

- (22) Bettina Granlich-Oka 「Tokugawa Women and Spacing the Self」 『*Early Modern Japan: An Interdisciplinary Journal*』 十四号（二〇〇六年） 56頁。（<http://hdl.handle.net/1811/24280> 参照。）
- (23) 宮川 『柳沢家の古典学（上）——松陰日記』の「解説」50頁。
- (24) この見解については早稲田大学法文学術院の尾崎安央氏のご教示を賜った。
- (25) 宮川葉子、池田友美 「徳川実紀」と「松陰日記」 『国際経営・文化研究』 十三巻二号（二〇〇九年三月） 190-161頁。
- (26) 「元禄の消費文化物語」は岩波文庫本『松陰日記』の裏表紙による。
- (27) Haruo Shirane, ed., *Early Modern Japanese Literature: An Anthology, 1600-1900* (New York: Columbia University Press, 2002).
- (28) Sumie Jones, with Kenji Watanabe, ed., *An Edo Anthology: Literature From Japan's Mega-City, 1750-1850* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2013).  
二〇二〇年二月 'Sumie Jones and Adam L. Kern, with Kenji Watanabe, ed., *A Kamigata Anthology: Literature from Japan's Metropolitan Centers, 1600-1750* も同ハワイ大学出版会から刊行予定。
- (29) 例えば林玲子編『女性の近世』（『日本の近世』第十五巻・中央公論社、一九九三年）の「序章」9-16頁。
- (30) 内田桃仙（一六八一-一七二〇）について、後藤祥子、宮川葉子、平館英子編『はじめて学ぶ日本女性文学史（古典編）』所収の福島理子「漢詩を作った女たち」（ミネルヴァ書房、二〇〇三年）を参照。町子と祇園梶子について、宮川葉子「祇園梶子試論——正親町町子との関連から——」 『国際経営・文化研究』 二十巻一号（二〇一五年十一月） 330-306頁を参照。
- (31) 門玲子 『江戸女流文学の発見 光ある身こそくるしき思ひなれ』（藤原書店、一九九八年）12頁。